

明日 への 話題

「ボイス」に 耳を傾けよ



早稲田大学大学院ビジネススクール
教授

かわもと ゆうこ
川本 裕子

経済学者のアルバード・ハーシュマンは、問題解決に向けての人々の選択肢としてボイス（意見を言う）とエグジット（離脱）という概念を打ち出した。例えば企業経営が行き詰まった時、株主は経営者交代などの改革案を株主総会で主張して打開を図る選択肢がある。これはボイスで、他方で株主が見切りをつけて株式を第3者に売却するのはエグジットだ。資本市場でのボイスへの対応は昨今進化している。

一方で、次世代への負担先送りを避けるための社会保障や財政改革、成長を高めるための構造改革などで停滞感が拭えない今の日本で、ボイスよりもエグジットを選択し始めているのでは、と心配になることがある。

少子化・高齢化による地方人口の縮小はある程度不可避だが、地方からのエグジットは特に20～30才代の若年女性に著しい。女性を追って若い男性も東京圏に集中するという現在の傾向は、地方にとって一層深刻だ。

この問題を英国人の友人に話したら、「それもそうだが、日本の意欲ある女性は海外に活路を見出していると思う」と言う。そこで出入国管理統計を見てみた。案の定、若い女性の出国数は同じ年代の男性と比べ、圧倒的に多い。2017年の20～24才の男性の出国数が約50万人に対し、女性は約100万人だった。15～29才でみると男性の140万人強に対し、女性は230万人強。30～40才代は男性の方が多く海外へ出かけるが、海外に6か月以上滞在している数は女性の方が多い。海外に住む在留邦人の数（外務省統計）で見ても、20～40才代の男性が30万人弱、女性は40万人弱である。

もちろん、統計解釈には慎重であるべきだが、若い女性が閉塞感漂う地方や日本からエグジットしているとしたら、その原因を虚心坦懐に考えてみる必要があるのではないか。

改革の議論で「しがらみにとらわれず」という掛け声をよく耳にするが、それはそれだけ古い価値観が根強い証左でもある。日本は男女の固定的な役割意識（女性の本務は家庭）が強く、結果として、日本の男性の家事、育児などの家庭責任の負担は、諸外国と比べて極めて低い。職場での昭和的な働き方や人事制度もなかなか変わらない。

こうした現状から、若い女性の中に地方のみならず、日本に見切りをつける人たちが増えていくのならそれは由々しきことだ。誰にとっても魅力ある経済社会をめざして、若い女性の声なき声（ボイス）に耳を傾け、改革議論をスピードアップすべきだろう。